カナダにおける「クリティカル・シンキング」

久米暁

北米の大学おいて近年、「クリティカル・シンキング」と呼ばれる授業が開講されている。筆者は、カナダのオタワ大学（University of Ottawa）において「クリティカル・シンキング」の授業のティーチング・アシスタントを務めた経験があるので、その経験をもとに、「クリティカル・シンキング」の位置づけや授業の行われ方について、筆者の印象を交えながら、簡単に紹介したい。以下の事情は、北米の大学における「クリティカル・シンキング」一般に必ずしも当てはまるものではないと思われるが、日本に「クリティカル・シンキング」を導入する際の参考になれば幸いである。

（1）必修科目

授業の正式名称は「推論とクリティカル・シンキング(Reasoning and Critical Thinking)」であり、授業内容の簡単な説明としては、「議論のタイプ、論理的構造、議論の評価において使われる基準、誤謬推理の諸形態を研究することによって、推論とクリティカル・シンキングの基本的な技術を発展させる」とある。特筆すべきことは、Faculty of Arts の全学科、たとえば、数学科、環境学科、地理学科、言語学科、女性学科、音楽学科、演劇学科、美術学科、歴史学科、文学科、宗教学科、哲学科等や、あるいは Faculty of Social Sciences の心理学科等において、この授業が一回生の必修科目(Compulsory Courses)と指定されている点である。こうした多くの学科における諸学に共通の基本的スキルとして「クリティカル・シンキング」が考えられているのである。九十分の授業が週二回、四ヶ月ほど続くので、学習量はそれほど少なくない。

（2）マス教育

それぞれのクラスにおいて、一人の教官が学生二百名以上に対し、大教室においてマイクとプロジェクターを使って授業を行う。したがって、授業の形態は演習ではなく講義である。一つのクラスに二名のティーチング・アシスタントがつくが、ティーチング・アシスタントの仕事は、授業時間外に質問を受けるためにティーチング・アシスタント・オフ

ィスに待機していることと、定期試験の採点をすることである。したがって、教官とティーチング・アシスタントの側が積極的に学生一人一人を指導するという機会はほとんどないと言ってよい。

「クリティカル・シンキング」といった技術の習得をめざした授業においては、こうした講義形態では行き届かない面もある。講義では、やはり、「クリティカル・シンキング」の技術の説明に主眼が置かれ、そういた技術を具体的に活用したエッセイ批判や、エッセイの執筆にまでは手が回らない。そのため、「クリティカル・シンキング」の授業も、結局は、知識の伝達に終わり、学生の積極的な取り組みも促せない、という印象を受けた。多くの学科の必修科目であるため学生数が多く、マス教育も致し方のないこととはいえ、教官とクラスの数をさらに増やし演習形態が可能にすることが、「クリティカル・シンキング」の授業には必要であるように感じられた。

（3）一律の授業

しかしそれでも、クラスの数は極めて多い。オタワ大学は、カナダの首都にある大学としてフランス語と英語のバイリンガリズムを採用しているため、両言語の授業が用意されている。「クリティカル・シンキング」も両言語の授業が用意され、一学期あたり英語のクラスが九個、フランス語のクラスが三個、計十二個が用意されている。多くの若い非常勤講師も授業を担当しているが、各教官は各クラスで独自の授業を展開するのではなく、全体として一律の授業を行っている。たとえば、英語の「クリティカル・シンキング」を担当する教官はすべて同じ教科書（「文献紹介」にある William Hughes の *Critical Thinking*）を使い、進度もほぼ一定である（試験と成績評価は各教官に任されている）。

（4）哲学科の教官

では、こうした数多くの「クリティカル・シンキング」の授業を担当するのはどういう人か。まずは、哲学科の専任教官である。また、非常勤講師として、当学の哲学科博士課程の学生が採用される。さらに、二名のティーチング・アシスタントも当学の哲学科の博士課程か修士課程の大学院生が採用される。非常勤講師（ふだんは哲学科博士課程の大学院生）には、哲学科のフロアに専用のオフィスが提供され、ティーチング・アシスタントにも哲学科の中に共用のティーチング・アシスタント・オフィスが提供されそこで質問の受付や採点を行う。すなわち、「クリティカル・シンキング」は、多くの学科で必修とさ

れる共通基礎科目であるが、哲学科がすべてを担当しているのである。

（5）バイリンガリズム

先ほど述べたように、オタワ大学では英語とフランス語の両方での授業が提供され、「クリティカル・シンキング」もその例外ではない。教官のほとんどは両言語をたやすく操るが、それでもなお、母国語をフランス語とする人と英語とする人との区別はある。恐らく人員の関係であろうが、フランス語を母国語とする教官が、英語が得意であるという理由から、英語の「クリティカル・シンキング」を担当することもあった。しかしその場合、授業やテストにおいて問題が生じなかったわけではない。簡単な例を一つ挙げると、筆者がティーチング・アシスタントをしていた時、"cow"という語が雌牛以外の牛を意味するか否かで正解が変わるテストがあり、フランス語を母国語とする教官が英語を母国語とする学生から訂正を求められるという一幕もあった。「クリティカル・シンキング」が、語の定義、分析判断－総合判断の区別、あるいは、語の意味に関わる論証といった事柄を、具体例を使って教える必要がある限り、その言語特有の言いまわしや語の意味に習熟している必要があり、また、そうした語感を前提として教材やテストを作る必要があることは言うまでもない。

実際、英語の「クリティカル・シンキング」の教科書は、英語特有の言いまわしを使って具体例や練習問題が作られている。また、英語特有の語を使っているからこそ興味深い例文になっているケースもある。"A bachelor is an unmarried man."が分析判断として日本においても興味深い例として使われるのは、その翻訳「独身男性は結婚していない男である。」を見れば分かるように、「結婚していない」という日本語を使わずに結婚していないということを意味する「独身」という語が、たまたま日本語にも存在するからである。しかし、それに対し、先の"cow"を使った、"A cow is a female."を分析判断の例として考えると、それを日本語に訳すとなれば、「雌牛は雌である。」としか翻訳することができない。これでは分析判断としてつまらない例になってしまう。このように、英語としては興味深いが、そのまま日本語に翻訳することによって台無しになるケースが「クリティカル・シンキング」には数多く存在する。英語で書かれた「クリティカル・シンキング」の教科書には優れたものも多い。「クリティカル・シンキング」教育の導入が遅れている日本には、そうした優れた英語の教科書をいち早く翻訳して、「クリティカル・シンキング」の概要を紹介することがまず必要であろう。しかし、日本語による「クリティカル・シンキング」の教科書もまた待望されるのである。